



弥生時代の人物絵画 ～豊作を祈るマツリ～

時代：弥生時代

調査名：清水風遺跡第7次調査

発見年：2019年

唐古・鍵遺跡とその北方の清水風遺跡からは、全国の出土例の約半数、450点余りの絵画土器が出土しています。清水風遺跡から出土した絵画土器の多くは、紀元前1世紀頃の河跡から発見されています。本年6月に調査した清水風遺跡第7次調査では、この河跡を検出し、25点の絵画土器が出土しました。

ここに展示している「両手を広げた人物」画は、高さ47cm程に復元できる大形甕の胴部上半に描かれたもので、全体は不明ですが顔と胴体部分が残っています。顔には眉・目・鼻・口が、胴体には乳房が描かれています。また、腕部分には三角形の衣の袖が描かれ、左袖は左上がりの斜線で、右腕は縦線で埋められています。また、その袖の先には5本の指が表現されています。

「両手を広げた（挙げた）人物」画は、全国で9例出土していますが、唐古・鍵遺跡の1例を除き、性別は判別できませんでした。今回の人物表現は、乳房を表現した唯一の例で、このポーズの人物が女性だった可能性が高まりました。

このような人物画では、頭に羽飾り状の表現が多くあり、「鳥装」の人物であろうと推測されています。鳥は靈魂を天上界へ運び、また地上に穀霊をもたらす存在だったようです。また、両手を広げた（挙げた）表現は、「袖を振る」所作と推定され、『万葉集』にみられます。この所作は、生命力の活性化や再生を願う呪術的儀礼（タマフリ）であり、絵画土器の用途が、当時の豊穰を願うマツリの中で使われたことが考えられます。

参考文献：辰巳和弘 1992『埴輪と絵画の古代学』白水社

